見たかったです。

真柄　参加する前は、被爆体験者や肉親を失った人などの話を直接聞きたいと思っていましたが、そういう機会がなくて残念でした。しかし、平和を願う広島の人の姿に触れることができて良かったと思います。

永井　資料館の中に原爆の熱線で変形した瓶や鉄柱があり、熱や破壊力が強いと思いました。また折り鶴の像の所に千羽鶴がたくさんあり、みんなの願いが分かりました。

丸山　原爆が投下された直後は五十年たたないと草も木も生えてこないといわれたそうです。それを広島の人たちは見事に再生しました。しかし街を再生するために、がれきの中で働いた人たちの多くが原爆症で亡くなったそうです。今、広島が美しい街になっているのは、その人たちのお陰なんだと感じました。

松原　美保さん

中丸　資料館で太い鉄が熱のために曲がってクネクネしていました。そのような高温の中で、生き延びた人がいるのに驚きました。また、いまだに原爆の後遺症で悩んでいる人が大勢います。原爆は投下されること自体も恐ろしいですが、その後の後遺症も、もっと恐ろしいものだと知りました。

司会　被爆者の体験談によれば、投下直後はあれだけの高温だったにもかかわらず、その一、二日後には、もうハエがいたといいます。焼けただれた皮膚にウジがわくという生々しい様子が語られていました。

来年は千羽鶴を持っていって

司会　では広島から帰って、友達に伝えたこと、また生徒会として取り組めることに、どんなことがあるかを話してください。

永井　聆子さん

中丸　本当に貴重な体験ができました。今度はぜひ被爆者の話も聞いてみたいと思います。資料などを持ってきたので、友達から見てもらいたいと思います。

丸山　八月十日の全校集会で早速報告をしました。報告では、復興には先人の大きな努力とそして大きな犠牲があったことを伝え、祖先が築いた平和を守ろうと訴えました。また、買い求めてきた資料は図書館に置き、多くの生徒から見てもらいたいと思っています。また、世界中で戦争のために苦しんでいる人々を助けるための募金などにも積極的に協力したいと考えます。

今井　敞さん

永井　丸山君と一緒に全校集会で報告しました。買ってきた資料は写真も多く入って分かりやすいものなので、隅から隅まで目を通してほしいと思います。

真柄　資料館で見たことなどを友達に伝えました。報告は二学期になってからだと思います。とても有意義な研修だったので、来年も多くの人から参加してほしいと思います。

松原　資料館で見た、焼けただれたひふをぶら下げて焼け野原をさまよっている人の姿の話を友達にしました。友達は「気持ちが悪い」と言いました。それもありますが、それ以前に原爆があってはならないということを、みんなで考えていかなければならないと思います。

鈴木　慰霊碑の前や折り鶴の像の前などにはたくさんの千羽鶴が供えられていました。来年行く人にはぜひ持っていってほしいと思います。

鈴木宏一郎さん

司会　今、市内の中学生は一千六百人余りです。一人ひとりの気持ちが届くよう、ぜひ考えてみたいことだと思います。

矢田　僕たちが祈念式典に参加したということで、友達はテレビや新聞を一生懸命見てくれました。仲間が行くということで、自然に関心を持ってくれました。

真柄　真剣にテレビを見たよと言われてうれしかったです。

司会　皆さんが第一回目ということでしたが、今後この研修に要望があれば話してください。

矢田　やはり、体験者の話を聞きたかったと思います。

真柄　それと、資料館を混まない日にゆっくりと見学したいと思いました。平和公園の中もゆっくり見たかったです。

平和を守るための学習を進めます

司会　最後に、平和を守るために僕たちにできることは何か、話してみてください。

中丸　人々の考えのちょっとした食い違いから戦争になったと思います。相手の立場を尊重して譲り合うことで、平和な世の中が続いていくと思います。

丸山　戦争は思想の違いから生まれてきたものと思います。譲り合う心と思いやりの心を持てば、解決すると思います。政治家は、自分のためではなく、世界の平和のために尽くしてほしいと思います。平和を守るには、僕たちの力が大切になります。学習を進めて、今の平和が大きな犠牲の上に成り立っていることを伝えていきたいと思います。

松原　ほかの人の立場をよく考えてあげることができれば、戦争も起きないと思います。そして、人種差別などもなくしていかなければならないと思います。

鈴木　戦争は人間の欲で起こったり、意見の違いで起こったりします。他人の意見を尊重して、争いには武力を使わないことが大切ではないでしょうか。僕たちはまだ中学生なので、二度と戦争を起こさないよう、歴史をよく学習したいと思います。

司会　今回の研修で、皆さんは一回り大きくなって帰ってきたように思います。そして、皆さんだけではなく、周りの人の平和、戦争に対する関心も深まったのではないでしょうか。皆さんの体験を多くの人に伝え、平和を守る学習を進めていただきたいと思います。

私の戦争体験

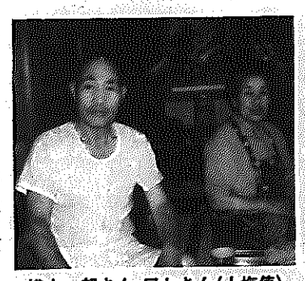
つらかったシベリア抑留　夫もいない家に嫁いで10年

（横山一郎さん夫妻）

一郎さん　戦争は二回行きました。初めは昭和十四年のノモンハン。何人も生き残りませんでした。日本軍の大砲などは使いものにならなかったんです。玉が届きません。撃っても戦車が攻め込んできます。精いっぱい引き寄せて撃てという命令でしたが、逆にどんどん玉が来る。本当に多くの人が死にました。

十五年に復員し、十六年十月にまた召集。新発田に少しいて、満州中部の戦線に行きました。終戦になってロシア軍の捕虜になり、三年間シベリアにいました。零下数十度という寒さは忘れられません。木材を切ったりするのが仕事でしたが、死んだ仲間を埋める穴を掘るのも我々の仕事でした。十分な衣服も食べ物もありません。寒さと栄養失調のため、次々に仲間が死にました。衣服と健康の大切さを、いやというほど知らされました。だから物を粗末にする今の風潮はちょっといただけません。

ワセさん　嫁に来たのは十六年十月。「召集令状が来たからすぐに（嫁に）来てくれ」と言われて、仲人さんに連れられて行きました。結婚式も何もありません。三日くらい一緒にいて、出征していきました。秋の忙しい時期で、働き手として急いでもらいに来られたんでしょう。

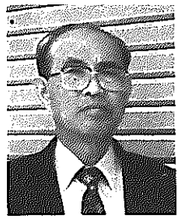

横山一郎さん、ワセさん（上塩俵）

戦争が終わってもなかなか帰ってきませんでした。弥彦に大きな石があって、それを持つと生死が分かるというんです。重くて持てなければ死んでいるし、持てれば生きている。私は持てたから生きているのだろうと信じていました。仕事をしていれば夫がいないのも忘れられましたが、雨がシトシト降っているようなときは涙が出て…。夫もいないところに嫁に来て十年。つらかったです。帰ってきたときは、うれしくてうれしくて。

そのころから見れば今は極楽です。同級生も男の人は戦争で大勢死にました。連れ合いを戦争で亡くした人もたくさんいます。平和な世の中が一番です。

私の戦争体験

ガダルカナルの死闘


坪川桐太郎さん（庄瀬5）

世の中に天国と地獄があるとすれば、ガダルカナル島で戦闘をした期間こそまさに地獄であった。戦闘自体が地獄なのに、四カ月の間、食うや食わずの毎日。むしろ一思いに敵弾に当たって、いちころになれば天国だったのかもしれない。

良い条件は一つもない。雨期の真っ盛りで昼夜びしょ濡れ。雨の降らない日は一日もなく、衣服の乾く間もない。獣や蛇さえ住まないジャングルが果てしなく続く。何万と生息するハマダラ蚊の大群は防ぎようがなく、いったん刺されるとマラリア病原虫が血液中に寄生して発熱性伝染病となる。生水を飲めばたちまち下痢をする。下痢が続くとデング熱を併発して脳症を起こし、反狂乱となる。敵弾を受けて戦死した人たちのほかに、このような状態で、助かるものも助からずに亡くなった人数のいかに多かったことか。

兵隊は鉄砲を持って敵と戦うのが本業なのに、武器弾薬の補充がない。輸送船で送られる弾薬は陸揚げしないうちに敵の飛行機の爆撃を受け、大半は爆発炎上し、船もろとも沈没してしまった。われわれに空手丸腰で戦えというのか。

上陸一カ月ほどで、目に見えて兵隊の数が少なくなった。一日何人という戦友が次から次へと死んでゆく。明日も知らぬわが運命である。ジリッジリッと敵に察知されないように後退が続く。歩いているうちに立ち木などにつかまると、すぐ睡魔が襲ってくる。眠ればそのままあの世行きだ。心はもうろうとして、奈落の底へ引きずり込まれるようである。

白旗を掲げて降伏する方法は一番容易であるが、皇軍というプライドと戦陣訓がそれを許さない。第一、亡くなった戦友を思えば、人間として決してできるものではない。

私は四カ月生き延びて、人間の生きる極限を体験した。これは尊い経験と受け止めている。しかしこれらを深く考えるとき、無謀な作戦を実行に移し、そのために三万五千人余りの尊い若い命を奪った巨大な力を、憎まずにはおられないのである。

センベイの砕くる如き音のして夜半につまずく戦友のなきがら